

令和七年度 第40回

こいずみ

やへん

# 小泉八雲をよむ

## 感想文・詩入賞作品集



共催 松江市  
松江市教育委員会  
一般社団法人八雲会

©soh

文学者小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とした様々な事業を行っています。

昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で四十回目となりました。今回は、感想文百三十三編、詩五十四編、合計百八十七編の力作をお寄せいただきました。

作品集には、応募作品のうち優秀賞、優良賞及び佳作を受賞した十九編の作品を掲載しています。多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

結びに、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

令和八年三月

共催  
後援

松江市・松江市教育委員会・一般社団法人八雲会

新宿区・熊本市・焼津市・小泉八雲記念館・山陰中央新報社

朝日新聞松江総局・毎日新聞松江支局・読売新聞松江支局

産経新聞社・日本経済新聞社松江支局・中国新聞社

新日本海新聞社・島根日日新聞社・共同通信社松江支局

時事通信社松江支局・NHK松江放送局

TSKさんいん中央テレビ・BSS山陰放送・日本海テレビ

エフエム山陰・山陰ケーブルビジョン

# 目 次

感想文 入賞者  
★小学生の部

〔優秀賞〕  
かがみのふしぎ

愛媛県松山市 若狭 早 (2年) …………… 1

〔優良賞〕  
梅津忠兵衛が私に教えてくれたこと

島根県松江市 北村 絵澄 (3年) …………… 2

〔佳作〕  
おもしろがっているのは、だれ。

島根県松江市 加藤 寿々 (2年) …………… 3

講 評 …………… 4

★中学生の部

〔優秀賞〕  
約束の重さ

兵庫県明石市 荒井咲里菜 (2年) …………… 5

〔優良賞〕  
二つの顔を持つ雪女

島根県安来市 宇山あおい (2年) …………… 6

〔佳作〕  
「雪女」を読んだ、「約束」という名の重み

広島県福山市 平櫛歩乃花 (2年) …………… 8

講 評 …………… 9

★高校生の部

〔優秀賞〕  
受け継がれる小泉八雲

北海道江別市 佐藤 健 (1年) …………… 10

〔優良賞〕  
日本人の微笑に見る国際交流の基本

大阪府茨木市 五味 愛琳 (2年) …………… 11

〔佳作〕  
「破られた約束」から学ぶ生きることとは

兵庫県神戸市 大八木菊乃 (2年) …………… 13

講 評 …………… 15

★一般の部

〔優秀賞〕  
雪女が映す日本の美と無常

北海道札幌市 山本 美和 …………… 15

〔優良賞〕  
MUJINAを味わう

東京都 霜倉 チャールズ元気 …………… 17

〔佳作〕  
青柳のはなし

兵庫県神戸市 宮寺 良平 …………… 19

〔佳作〕  
もしも自分が雪女だったら

福岡県北九州市 有馬 広海 …………… 20

〔佳作〕  
海を巡って

静岡県静岡市 鈴木 ゆみ …………… 22

講 評 …………… 24

詩

入賞者

〔優秀賞〕  
雪の虹彩

東京都文京区 岩本 遥 …………… 24

〔優良賞〕  
海を渡る影

大阪府大阪市 どひひ …………… 26

〔佳作〕  
怪物のいいわけ

埼玉県さいたま市 くるみ …………… 27

〔佳作〕  
出会ったのは風の民

宮崎県児湯郡 日野 秀子 …………… 28

〔佳作〕  
むじなの詩

東京都墨田区 牛坂 夏輝 …………… 31

講 評 …………… 32

# 感想文

## 小学生の部

### 〈優秀賞〉

#### かがみのふしぎ

愛媛県松山市 若狭 早

かがみって、ふしぎだ。ぼくは赤ちゃんの時、小さな赤い手かがみをおもちゃにしてあそんでいたらしい。きつと、自分と同じ赤ちゃんがうつって、おもしろかったのだと思う。今でもかがみは、ふしぎでとくべつ。

ぼくは『かいだん 小泉八雲のこわい話』だいかんからだい十かんまで、ぜんぶ読んだ。少しこわくて、ふしぎで、知ったらだれかに教えてあげたくなるお話だった。だい八かんの『かがみのおとめ』は、「あくりょう」だと思っていたものの正体がだんだん分かってくるお話。つづきが気になって、さいごまで止まらず読んでしまった。

お話には、くりかえし読みたくなるものがある。楽しいことやおもしろいことなど、読むとワクワクできるもの。もう一つは、少しむずかしくて、くりかえし読む内に新しい気づきがあるもの。ぼく

は『かがみのおとめ』を一気に読んでから、何回も読みかえた。それは、少しむずかしかったからだ。

まず、室町じだいについて。どんなじだいか分からなかったの  
で、ぼくはれきしの本についている年びようでさがした。じだいげ  
きでよく見かける、えどじだいよりも前のじだいだった。室町じだ  
いの家や食べもの、きものなどを見ると、お話のようすがもつと分  
かってきた。

つぎに、神社の「ぐうじ」というしごとについて。『かがみのお  
とめ』に出てくる松村ひょうごは「ぐうじ」だ。ひょうごは神さま  
にしっかりとかえていたから、いのちがたすかった。ふだんはどう  
やって神さまにつかえるのだろう。ぼくは生活科の町たんけんの  
時、学校の近くの「いさにわ神社」に行つて「ぐうじ」の人にたく  
さん教えてもらった。

そして、かがみについて。なんとなく思いうかぶ、ふしぎでとく  
べつなかんじ。むかしの人、外国の人と同じようにかんじていたそ  
うだ。日本神話には「やたのかがみ」が出てくる。『白雪ひめ』に  
は、本当のことを言うかがみが出てくる。ほかに、かがみが大切  
なやくわりをもったお話はたくさんあると知った。ぼくはまだ読ん  
でいないので、これから読んでみたいと思う。

三月「やよい」の名前がついた、かがみのおとめ。ひなまつり生  
まれのぼくは、なかよくなれそうな気がした。どくりゆうにつか  
まって、ずっと自分をせめていたなんて。手入れされてきれいな  
なったすがたは、さいしょとぜんぜんちがつて見えた。

何回読んでも『かがみのおとめ』はおもしろい。知りたいことがどんどんふえていく。ヘルンさんのおかげで、むかしのお話を今も楽しむことができる。だれかに教えてあげたい、その気もちが本という形になったのかなとほくは思う。

## 〈優良賞〉

### 梅津忠兵衛が私に教えてくれたこと

島根県松江市 北村 絵 澄

梅津忠兵衛は、どうして氏神から、強力をさずかったのか。梅津忠兵衛の話で私が一番ふしぎに感じたのはそのことです。忠兵衛の力はもとから大きいのですから、赤子を抱きつづけたお札には、忠兵衛がまだもっていないような、たくさんのお金や、えらい身分や、美しいけつこん相手などをさずけたらいいのに、どうして、もとから大きい力をもっともっと大きくすることにしたのだろう、と想ったのです。そこで私は、忠兵衛の力の、特別なところについて考えました。

忠兵衛は、ただもともと力が大きい人ではありません。忠兵衛は、約束をとてても大事にする人です。赤子が重くなり、女にだまされた、と思っても、けつして赤子を手放しません。それは、女と

約束をしたからです、それだけでなく、自分自身との約束があるからです。自分は武士として正しく生きるのだ、と決意した自分との約束です。忠兵衛は、その約束を何よりも大事にしているから、その場その場の都合で考えを変えることはありません。自分が何をすべきかをけつして忘れず、自分の大きな力を、迷わず使うことができます。

そして忠兵衛は、その大きな力の使い方を、とてもいいねいに考えることができる人です。強力をさずかった忠兵衛が最初に考えたのは、「ものにさわる時、うっかり指先でつぶさないように気をつけなければならぬ」ということでした。強力を使って自分の思いどおりにできる、とは思わずに、はじめからそうして注意深く考える忠兵衛ですから、どんなことがあっても、さずかった強力の使い方を、ていねいに考えることができるはずで。

忠兵衛がそのような人だからこそ、氏神は忠兵衛に赤子をあずけ、そして、その大きな力をさらに大きくすることを選んだのだと思います。

もし、私たちの世界で強い「力」をもっている人たちがみんな、自分のすべきこと、自分との約束を守りつづけて、「力」の使い方をていねいに考えることができたなら、この世界は今よりもずっと平和な世界になるはずで。

私には、今は小さな力しかないけれど、それが大きくなったときにどのように使えるか、いつもていねいに想像しながら、その力を大きく育てていきたいと思えます。そして、自分がすべきことは何

かを考え、そのことを決意した自分との約束を守ることも、大切にしたいと考えています。そうすれば、いつか私も、世界の平和に役だつような、本当の「強力」を身につけることができると思います。

忠兵衛から勇気をもらった私は、今年、世界の恵まれない子どもたちに絵本を贈るための、音楽と落語のチャリティーライブをしようと思いついて、それを実現することができました。今の私の小さな力で実現できたことはまだほんの少しです。でも、この私の力を、本当の「強力」へと育てていくために、忠兵衛のように、自分との約束を胸に抱いて、力の使い方について考えることを、ずっと大切にしていきたいと思っています。

## 〈佳作〉

おもしろがっているのは、だれ。

島根県松江市 加藤 寿々々

「わたしも、ムジナに会ってみたいなあ。」

これが、本を読みおわったときに、わたしははじめに思ったことです。なぜなら、二回ものつべらぼうが出てきて、とてもわくわくしたからです。

わたしが読んだお話は、小泉八雲の『ムジナ』です。このお話は、え戸時だいのきの国ざかというところで、ムジナがしょう人をおどろかす話です。

わたしは、しょう人のことをとてもやさしい人だと思いました。はじめて会ったあい手にも、何ども声をかけて心ばいするような人だからです。そんな親切なしょう人をくりかえしだまして、ムジナは悪いようかいだと思いました。しかし、お話をよく読むと、ムジナはしょう人をおどろかしただけで、いのちをうばったり、けがをさせたりしたわけではありません。

ムジナについてしらべてみると、アナグマやタヌキ、ハクビシンのことだとわかりました。これらのどうぶつは、わたしの家の近くでもよく見かけます。とくにアナグマは、体が毛むくじゃらで、五十センチメートルくらいあります。草むらからとつぜん飛び出してくるので、きげんです。

え戸ほどのくらやみではなくても、しまねの冬はともくらいです。もし、おそくなつたならいごのかえり道に、のつべらぼうのムジナがあらわれたらどうするのか、そうぞうしてみました。きつと、わたしはびっくりしすぎて、前にたおれてしまうと思います。そして、そのままムジナをつかまえて、

「どうして、こんなことするの。」

と、直せつりゆうを聞いてみたいです。

わたしが考えたりゆうは、二つあります。一つ目は、ムジナはようかいだから、人をおどろかすやく目があるのかもしれないという

こと。二つ目は、人間のはんのうをおもしろがっているということ  
です。どちらにしても、同じ道は二どと通れなくなってしまうかも  
しれません。

とくに心にのこっている場めんは、ムジナが顔をなでて正体を明  
かすところです。これは、とてもようかいらしいごきで、目がは  
なせないと思いました。このうごきによって、ムジナはひょうじょ  
うがないのに、さらにこわさをかんじたのです。

わたしは、絵をかくことがとても好きです。人の顔をかくとき  
に、目やまゆ、口などはとても大切です。ところが、顔に目や口が  
あっても、それらをうごかさなければ、気もちはつたわりません。  
それは、人間だって同じです。そのような顔をむけられると、ぶ気  
味だし、あい手がおこっているのかと心ばいになります。もしかし  
たら八雲も、だれかとの間で、そんなふあんな気もちになったこと  
があつたのかもしれない。

八雲やセツは、きつと楽しみながら、このお話を本にまとめた  
と思います。もしかしたら、実さいの場しよや時間にも行ったのかも  
しれません。それほどしんけん書いたお話だから、何ども読んで  
り聞いたりしたくなるでしょう。あい手のはんのうをおもしろ  
がっているのは、八雲も同じだなと思いました。

## 講評

今年の応募作品は、昨年の三点から大幅に増えて十四点となつた。NHK朝の連続テレビ小説「ばけばけ」が放映中であり、その効果が大きいとは思うが、応募数が多いことは大変嬉しいことであり、今後も全国から多くの応募があることを願っている。

優秀賞の作品は、「鏡の乙女」を読む中でいくつもの疑問を持ち、それらを解明しながら何度も読み返し、自分の考えを広げていく姿に好感が持てた。自分の疑問を解明し、楽しみながら読み進める姿は、佳作の作品からも感じることができ、小泉八雲の作品を楽しむ一つの姿として多くのこともたちにも体験して欲しい。また、優秀賞の「鏡の乙女」、優良賞の「梅津忠兵衛」ともに、本コンクールではあまり選書されていない作品であり、小泉八雲の作品を幅広く親しむこどもたちの姿にも期待したい。

(講評者 井上 孝弘)

## 中学生の部

### 〈優秀賞〉

#### 約束の重さ

兵庫県明石市 荒 井 咲里菜

読み終えたあと、たった数ページほどの物語とは思えない冷たく暗い読後感を味わった。それは、小泉八雲の作品『破られた約束』である。

怖かった。私はこの作品を読んで確かな恐怖感を覚えた。それは、夜に鳴った鈴でも、首のない死体でもなかった。約束の重さである。

この作品の男は悪意を持って約束を破ったわけではない。周囲に勧められ、侍としての立場のために再婚を選んだ男が破ったのはたった一つの約束である。

「再婚しない」

この一言に男はどれほどの責任を感じていたのだろうか。作品内でこの言葉を、妻への愛を表す表現として口にされている。しかし同時に、それは軽く、あまりにも容易に口にされた言葉でもあった。

この作品の「約束」は口約束である。つまり、約束に形はなかったのだ。形もなければ重さもない。守られている間は何も感じな

い。ただ、破られた瞬間、その重さが現れる。「約束が破られた」この事実がどれほど残酷なものかを描いているように感じた。

妻が復讐したのは夫ではなかった。夫の再婚相手である。

妻は丑の刻、妖怪や幽霊が現れるとされる時間に再婚相手の前に現れた。そして警告を伝えた。嘆くのも、叫ぶのでもなく、静かに、つぶやいている。感情をあらわにしていなのだ。まるで当然のことであるかのように告げ、最後、妻が首をしっかりと握っている描写に私は「怒り」を感じた。しかしそれは本当に「怒り」だけなのであるか。これは復讐者と言うより、破られた約束そのものを表し、静かに回収していく冷たい物語であるように感じた。

なぜ約束を破ったのは夫であるのに、妻は事情を知らない夫の再婚相手に復讐したのか。それは、約束を破った瞬間から、夫ではなく「新しい生活そのもの」が対象になったからではないだろうか。

妻は夫に三つの約束を守ってもらうよう頼んだ。

一つ目は「再婚しないこと」

二つ目は「二人で植えた梅の木の下に妻を埋めること」

三つ目は「お遍路様が持つような鈴を一緒に埋めること」

妻は二つ目の約束を言うとき、「時々あなたの声も聞けるし、花も見れる」と言った。初め、私はこの文章になんの違和感も感じなかった。しかし、再読したとき、それは単なる情によるものではなく、「私はあなたの近くであなたを見ている」という束縛、目印、監視のように思えた。

また、「鈴」も何かを暗示しているのではと考えた。本来、お遍

路様が持つ鈴には魔除けなどの意味がある。だが、この作品では全く別の意味を表している。チリンチリン。妻が最初に聞いた鈴の音である。鈴の音が明らかに近付いてきているのを察した。見えていなくても、音が聞こえる。約束を見て見ぬふりをしている、約束はまだ生きている。外間から聞こえる鈴の音はそれをどこか感じさせていた。

この物語は百年ほど前の古い時代の怪談である。しかし、百年経った今にも残る恐怖を持っていると感じた。現代ではSNSなど、様々な連絡を取る手段が生まれた。だからこそ、日常的に約束を交わすことが多い。しかし、その言葉が相手にとってどれほどの意味を持つのか、深く考えることはない。日常に多くあるからこそ、その大切さの認識が薄れているのではないか。この作品は、言葉の意味が薄れていく現代に対して、言葉の責任から目を背けることの危うさも感じられた。私自身、これまでに交わしてきた約束を思い返さずにはいられなかった。

この話は最後にこう締めくくられている。

『「これはひどい話だ」とわたしはこの話をしてくれた友人にむかっていった。『この死人の復讐は……もしやるなら……男にむかってやるべきだ』。』

『男はみなそう考えます』彼は答えた。『しかし、それは女の感じ方ではありません』

彼の言うとおりであった。」

この文章が単なる物語ではなく、価値観の物語に変えている。

私は、八雲は「誰が悪いか」と言う視点で語っているように感じた。しかし友人は「約束が守られたか」を見ている。「それは女の感じ方ではありません」この一言が、どこか突き放し、物語を冷たくしている。

この作品は単なる怪談ではない。約束を破る瞬間に知る冷たさを描いた作品として読み終えた。私はもう以前のように軽々しく「約束」という言葉を使えなくなった。

## 〈優良賞〉

### 二つの顔を持つ雪女

島根県安来市 宇山 あおい

「あたし、あたし、あたしだったのさ！」

私は雪女を読んでから、お雪が放ったこの言葉が頭を離れませんでした。この言葉には、お雪の複雑な感情が全て込められているように感じました。

巳之吉が雪女、つまりお雪に初めて出会ったのは、山小屋でのことでした。そのとき、お雪は正体を見られてしまったのにもかかわらず、口止めだけをして巳之吉を殺しませんでした。思えばこの頃から、すでにお雪は巳之吉に好意を抱き始めていたのだと思いま

す。後に巳之吉は山小屋で会った雪女とは知らず、お雪と結婚しました。最初は見張るために巳之吉に近づいたお雪。しかし、巳之吉を知れば知るほど恋に落ち、本気で愛するようになります。その瞬間は、二人が両想いになった幸せな場面のように思えました。

しかし、きつとこの時からお雪の人生は狂い始めていたのです。『雪女』という、人を殺す冷酷で恐ろしい妖怪が人間を好きになり、凍えさせるほどの冷たさをもちながらも、恋という温かな感情が芽生えてしまった。この喜びともいえる感情こそが、お雪を苦しめていったのです。

子どもが十人も生まれ、二人が幸せな日々を迷っていたある日。色白で衰えないお雪の様子を見た巳之吉は、ついに約束を破り、あの日の出来事を話してしまいます。お雪は、「話したら命はない」と言っていたのに、またもや巳之吉を殺しませんでした。いや、殺せなかったのです。このときお雪は葛藤の末、雪女としてではなく、巳之吉と十人の子どもを愛する母親として「殺さない」という選択をしたのだと思いました。

もし私がお雪の立場なら、「そのことにさえ触れなければ幸せに生きられたのに！」と強く思うでしょう。そして、人間と妖怪という越えられない境界に深く傷つくと思います。実際、お雪もそう思ったからこそ、この冒頭の言葉のように声を荒げたのではないのでしょうか。巳之吉を信じていたからこそ、なおさら裏切られた気持ちになり、幸せが続くことを信じていた自分にも絶望したと思います。

しかし、雪女の話をお雪がしたのは、他でもないお雪自身が、「その女の人のことを話してくださいな」と促したからです。この言葉から、お雪の心情が伝わってきます。純粹にどう思っていたのか気になる気持ち、約束を覚えているのか試したくなった気持ち、そして巳之吉の前からいなくなる覚悟。これらが絡み合った結果、その言葉が口から出たのだと思います。

巳之吉と人間として生きていきたかったお雪。しかしそれが叶わないことを悟った。それならばせめて、巳之吉を残し、子どもたちを守りたいと思った、母としての顔。一方で、茂作を殺した雪女としての顔。この正反対の二つの顔こそが、恐ろしくも美しい『雪女』という妖怪なのだと思ってきました。雪女は、私の知っている物語の中でもトップレベルで切なく、美しく儂い話だと感じました。

最後に、『雪女』は人間に一つの忠告をしているように思います。それは、口約束の軽さへの注意です。私自身も、もう時効だと思つて話してしまった秘密があります。大切な約束を軽く扱うことで、二度と元に戻らない悲劇が生まれてしまうことがある。巳之吉は、人間の性質を象徴しているように思いました。このことの大切さを改めて考えさせられました。

この感想文を書くにあたって、私は初めて「怪談」というジャンルに触れました。読む前は、怪談＝怖い話だと思っていました。しかし、『雪女』を読んで、そのイメージは一八〇度変わりました。今の私にとって怪談とは、単に怖い話ではなく、妖怪などの「見えないもの」や、人間が日常では気づかない心や魂を言葉にしたもの

であり、世界を広く見るために必要なのだと感じています。

この世界には、人間以外にもさまざまな生き物、植物、そして魂があります。人間は自分たちが一番発達していると思いがちで、視野が狭くなってしまう。小泉八雲さんのように「見えないもの」に目を向ければ、きっと世界の見方が変わるだろうと思えました。もちろん、「雪女」等を読んだからといって、誰もが「見えないもの」に意識を向けられるわけではありません。しかし、きっと何かしらの物が見方が変わるはず。今回私が読ませていただいたのは保永貞夫さんが訳されたものですが、訳者によって物語の印象が変わるだろうと思うと色々な本を読みたいです。これから、「見えないもの」に意識を向け、さまざまな怪談を読んでいきたいと思えます。

## 〈佳作〉

「雪女」を読んだ、

「約束」という名の重み

広島県福山市 平 櫛 歩乃花

私は小泉八雲の「雪女」を読んで、物語の美しさや切なさだけでなく、「約束」という言葉を持つ、計り知れない重さについて深く

考えさせられました。この作品が問いかけるテーマは、遠い昔の話ではなく、私たちが友だちや家族と向き合う毎日の生活に、そのまま当てはまるように感じました。

物語の中で、主人公の巳之吉は、命を救われた代わりに「誰にも話してはいけない」という絶対の約束を雪女と交わします。しかし、彼はその後、愛する妻を得て幸せな結婚生活を送るうち、その約束の重さを忘れてしまいます。「この人になら話しても大丈夫だろう」という甘えから、つい秘密を打ち明けてしまうのです。

私は、この巳之吉の行動が私たちの日常に潜む「心の油断」を象徴していると感じました。

私自身、親しい友人から「絶対に誰にも言わないで」と言われ、秘密を打ち明けられた経験があります。その秘密を抱えている間は、特別な絆を感じていましたが、他の友達と親しくなった時や、秘密を守り続けることに疲れた時、「少しだけならいいか」と誘惑にかられたことがあります。もしあの時、私が誘惑に負けていたら、親友との信頼関係は一瞬で壊れていたでしょう。巳之吉の悲劇は、親しさや安心感が、誓いの重みを薄れさせてしまうという、人間の心の弱さを教えてくれました。私は約束とは、相手が誰であっても、その重さが変わることはないという、強い責任を感じました。

またこの物語を深く感動的なものにしてるのは、約束を破られた雪女の最後の決断です。本来、掟に従えば、雪女は巳之吉の命を奪わなければなりません。しかし、彼女は巳之吉と暮らす中「夫を

愛する心」や「子どもを守りたいという母の情」を知りました。雪女は、冷たい「掟」と温かい「情」の間で激しく迷い、最終的に「子どもたちのために」と夫を許し、自ら愛する家庭を捨てて、冷たい雪の中へと帰っていきます。

この雪女の姿は、私に「本当に大切なものは何か」と深く考えさせました。雪女の決断は、愛する者を守るために、自分の幸せを犠牲にする最も強い責任感の現れです。私たちは、家族の愛を通じて、誰かを大切にすることを知ります。そして、誰かを大切にすることは、その人の秘密を守り抜く責任や、時には自分が我慢して相手を優先する覚悟もともなうのだと、雪女の悲しい決断は教えてくれます。愛は、ただ「好き」という感情だけでなく、「責任」をとらなう、大きなものなのです。

小泉八雲の「雪女」は、私たちに「言葉の重み」と「信頼の壊れやすさ」を教えてくれる、一般的な作品です。

私はこの物語を読んだことで、学校生活や家庭の中で交わす小さな約束も、決して軽く扱ってはいけないと心に誓いました。そして、巳之吉の失敗を教訓として、親しい間柄であっても決して油断せず、一つ一つの信頼を大切に守り抜く人間になりたいと思います。雪女が示したような強い愛情と責任感をもって、周りの大切な人たちと向き合っていきたいと強く感じました。

## 講評

今年度は、昨年度に比べて応募が減少し、十点だったが、中学生らしい感性で、登場人物の行動から心情を読み取ったり、行動の意図を深掘りしたりする作品が多かったです。

優秀賞は、主人公に対して、「女性」という視点で、心情を考察したり、自分なりの解釈を付けたりして感想にまとめているのは斬新かつ新鮮でした。

優良賞、佳作をはじめ多くの作品が、自分の経験と作品を重ねたり、共通点を見出したりすることで、深い読み取りにつながっていました。その一方で、読み取ったことや深掘りしたことの説明に必要な分量がやや不足している作品がありました。読み手の立場になって推敲することで、自分の思いが、読み手にもっと伝わる感想文になると思います。

(講評者 川上 淳一)

## 高校生の部

### 〈優秀賞〉

#### 受け継がれる小泉八雲

北海道江別市 佐藤 健

小泉八雲が書く物語の最大の特徴は、表現の多彩さにあると私は考える。それが最も顕著に表れているのが、私の好きな物語「耳無芳一」である。特に印象的なのは、芳一が耳を切り取られる場面だ。芳一は盲目であり、視覚情報を描写できない。大抵の作家であれば、これは大きな制約となるだろう。しかし八雲は、この制約を逆手に取った。盲目だからこそ研ぎ澄まされた芳一の聴覚や触覚を、丁寧かつダイナミックに描き出したのだ。雨音、足音、そして最後には自らの耳が引きちぎられる感覚までもが、読者の耳に生々しく響いてくる。視覚に頼らないからこそ、かえって恐怖は増幅される。これこそが、八雲の卓越した技巧である。こうした表現の多彩さは、他の作品にも一貫して見られる。

「雪女」では、白と冷たさの感覚が物語全体を支配している。雪女の美しさは視覚的に描かれるだけでなく、凍りつくような冷気として肌を感じられ、凍えた吐息として聞こえてくる。「むじな」では、顔のない人間という視覚的恐怖を、まず言葉で語らせてから、振り向いた瞬間に「のっぺらぼう」として示す。この段階的な演出

が、読者の恐怖を最大限に引き出している。また「食人鬼」では、異様な静けさと緊張感が文章のリズムそのものに込められており、言葉の選び方一つひとつに緊迫感が漂う。八雲は五感だけでなく、雰囲気や間、沈黙といった目に見えない要素までも総動員することで、読者を物語の世界へ引き込んでいるのだ。これはもはや単なる技巧ではない。日本の怪談が本来持っていた「語り」の伝統を、文字という媒体で再現しようとした八雲の執念の結晶なのである。

八雲の作品が優れていると言える他の理由に、日本文化への深い理解と敬意がある。八雲は単に怪談を収集したのではない。その背景にある日本人の死生観、自然観、霊的世界観を丁寧に掬い取った。「お貞の話」には仏教的な因果応報の思想が、「ろくろ首」には妖怪という存在に対する日本人の両義的な感情が、それぞれ織り込まれている。外国人でありながら、いや、外国人だからこそ、八雲は日本文化の本質を鋭く捉えることができたのだ。そして、それを普遍的な物語として昇華させたのである。

私が耳無芳一の物語、そして小泉八雲という作家を知るきっかけとなったのは、Creepy Nutsの楽曲「耳なし芳一Style」である。この曲は物語本編からインスピレーションを受けながら、現代的な要素を織り交ぜた新しいヒップホップだ。R指定とDJ松永という二人のアーティストは、八雲の物語を現代のビートとリリックで再解釈し、若い世代に届けることに成功した。この曲を聴けば、芳一が感じた恐怖を体験できるだろう。また今年、NHKの連続テレビ小説「ばけばけ」が放送され、八雲を知らなかった人々にも、

彼の世界に触れるきっかけを提供した。このように、小泉八雲の作品は文学作品としてだけでなく、映画、アニメ、漫画、音楽といった多様なメディアで再創造されている。時代を超えて受け継がれ、様々な形で現代に生き続けているのだ。

八雲の作品が受け継がれる理由は、それが単なる怖い話ではなく、人間の根源的な感情に触れる普遍性を持っているからだだろう。愛や死、孤独、恐怖、そして超自然的なものへの畏敬。これらのテーマは時代が変わっても色褪せることがない。また八雲の文体は、簡潔でありながら詩的であり、翻訳を通してその美しさが伝わってくる。八雲の作品を読むと、まるで最初から日本語で書かれていたかのような自然さを感じる。これは八雲が日本の心を深く理解していた証であり、また優れた翻訳者たちの功績でもある。

現代において、私たちは情報過多の時代に生きている。スマートフォンや画面には常に新しい刺激が溢れ、ゆっくりと物語に浸る時間は少なくなっている。しかし、だからこそ八雲の作品は新鮮に感じられるのだ。八雲の怪談は、静寂の中でこそ真価を発揮する。ページをめくる音、自分の呼吸、遠くから聞こえる物音。そうした小さな感覚に意識を向けながら読むとき、私たちは八雲が描いた世界に深く入り込むことができる。その瞬間に、私たちもまた、過去から現在へ受け継がれてきた文化の連鎖の一部となることができるのだ。八雲の物語を読み、語り、新しい形で表現していくこと。それこそが、次の世代へ文化を受け継ぐ私たちの役割なのではないだろうか。物語は語られることで生き続ける。小泉八雲の遺産は、私

たちが感じ、語り続ける限り、永遠に色褪せることはないのだ。

## 〈優良賞〉

### 日本人の微笑に見る国際交流の基本

大阪府茨木市 五味 愛 琳

「国際交流の基本かも知れない。」

これは、私が、小泉八雲の『日本人の微笑』を読んだ感想だ。八雲は、知り合いの外国人から、日本人は常に微笑んでいる。それは、嬉しい時だけでなく、人が死んだ時、何か誤りを犯してしまった時、そして、人に怒られた時にも微笑んでいる。この理解不能な日本人の微笑の理由を探求して欲しいと言われた。

伝統を重んじるがため、微笑を好まず、人に微笑まされると自分が侮辱されていると感じる傾向が強い欧米人は、むっつりとした表情で人と接するという。そんな彼らからしたら、いつでも、どこでも微笑む日本人は、奇妙に映ったに違いない。

日本人の微笑の背景を理解しないがため、外国人の雇い主と日本人の使用人の間で軋轢を生み、殺人にも発展したケースもあつたという。

そのため、当時の欧米人は、日本人の微笑の謎を探求する必要があると考えた。

八雲は、日本人の微笑を理解するには、昔ながらの、あるがままの、日本の庶民の生活に立ち入る必要がある、そして、日本人に対し、親しみと共感を持つことが出来れば、その秘密を理解することが出来るとした。

私は、このことを、庶民の生活レベルまで自分の視点を下げ、相手の文化を客観視し、自身の文化との違いがあればその違いをしつかり「違い」として受け入れる態度が必要だと解釈した。

日本社会では、幼い時から、手をついてする丁寧なお辞儀同様に、微笑みが教えられ、いつでも元氣そうな態度を見せ、他人に愉快そうな印象を与えることが、生活の規範、しきたりとされる。また、逆に、深刻であったり、不幸そうに見えたりすることは、無礼なこと、忌避されるべきものと考えられている。

そのため、人の死など不幸な時にも笑みを浮かべることは、自己を押し殺してでも礼節を守ろうとする日本的な礼儀正しさであると結論付けた。

重要なことは、日本人の「あるがまま」を「親しみと共感を持つて受け入れる」こと。違いがあれば、「その違いを違いとして受け入れる態度」だとした。

私は、父の仕事の関係で、中国、韓国で生活し、それぞれの国で反日デモを経験した。

現地の友人とは仲が良いのに、国同士になると喧嘩ばかりしている。この原因はどこから生まれ、どうすれば日本は隣国と仲良く出来るかを幼い時から考えてきた。

友人同士の場合には、お互いに、自由に、いつでも、何度でもコミュニケーションが出来るため、自然と相手の良い点、悪い点を理解し、たとえ誤解が生まれたとしても、すぐに解消することが出来る。

一方、国の場合には、会話をする時間も限られ、また、自分たちの一方的な利益を述べるだけで、お互いに折り合うことがなかなか出来ない。

この違いによるものではないかと考えた。

また、国際的な交流についても、主に大学生が、少人数で一度きりという従来型の交流では、相手の国を客観視し、違いを「違い」として理解するための時間は限られる。また、仮に違いを「違い」として理解出来たとしてもその人数は少なく、伝播力も限られるため、交流の効率が悪いと考えた。

そこで、私は、中学・高校という感性豊かな若い時から、継続的に大人数が参加出来るオンライン交流とその集大成としてのオフライン交流を合わせたハイブリット交流を行うべきだと考えた。これにより、多くの人が、違いを「違い」と認識出来ると考え、高校の探究活動では、ハイブリット交流モデルによる新たな日韓交流のあり方を研究している。

長い期間に渡って交流を行うことで、相手との違いを「違い」として客観視出来、それにより誤解を生まない環境を整備出来ることを自身の海外での経験から学んだからだ。

日本人の微笑に出てくる外国人は、まさに自分の国と日本との違

いを「違い」として認識、受け入れることが出来ず、誤解を生み、そして、時に、殺人にまで発展するケースがあったのではないか。

あるがままの、日本の庶民の生活に立ち入る必要性、日本人に対し、親しみと共感を持つことの重要性。この二つの考え方は、一三〇年経った今でも新鮮で、多くの人が気づいていないことなのではないか。複雑化する国際社会の中で、このことを日本だけでなく、世界が学ぶ必要があるのではないかと考えた。

私は『日本人の微笑』を読み、開国して間もない時期に、八雲によって国際交流の基本が的確に書かれていたことを知り、八雲の視野の深さに驚くと共に、未だ変わらない国際社会を見ると、人間というものは、進歩しない生き物なのだとも感じた。

私は、若い頃から継続的な交流が可能なオン・オフライン交流を新たな日本の交流モデルとして確立したい。そして、このモデルを通じ、相手を客観視出来、アジアの、そして、世界の平和安定に寄与できる人材を育成したい。

一三〇年前のヒントを実現させる私の旅、八雲も頑張れと私の背中を押してくれるに違いない。

## 〈佳作〉

### 「破られた約束」から学ぶ生きることは

兵庫県神戸市 大八木 菊 乃

一九〇一年、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）によって著された「破られた約束」では、「鈴」が印象的に描かれている。初めから終わりまで、女と鈴はともにあった。

「鈴」が重要な役割を果たすならば、女が死に際に、侍に対してお遍路様のような鈴と一緒に埋葬するように頼んだことは、深い意味を孕んでいると考えられる。そもそも、お遍路様の持つ鈴にはいくつかの意味があり、その中でも特に注目したいのは、自分の存在を知らせるというものだ。元は危険の多い山道で、仲間の位置を把握するために使っていたことが基盤となっている。女は別れるとき、男の今後を気遣い、後妻のことにまで言及する。最後まで良妻賢母であろうと努めた彼女の強さは、この物語が書かれた明治時代の女性そのものだ。だが、その後彼女は本音を漏らしてしまう。そこで彼女が望んだのは、侍の傍にいて、自分の存在を伝える鈴であった。

そんな一見すると健気で思いやりのある、できた女性である彼女が花嫁を追い詰め、そして殺してしまうに至ったのは、相当の理由があるはずだ。それは男が約束を破り自分以外の人を愛してしまっただからだという単純なものなのだろうか。私はそれだけだとは思わ

ない。女は、ただ男に自分の存在を思い出して欲しかったのではないだろうか。

もうこの世に存在しない死者が、生者との繋がりを保つためには、生者からのアクションが必要である。それは、魂が現世に戻り再び同じ空間を過ごすという大きな意味のある、メキシコの死者の日や、日本の盆などで強く実感できる。

私たちは誰かの記憶に残ることで初めて、死んでもなおその存在を現世に残すことができる。それは教科書に掲載されることもかもしれないし、ある食べ物が生前の自分が好んでいたものだと気づいたとき、はたまた故人のいない誕生日を迎えたときかもしれない。たとえ本人がいなくても、その人の残り香を感じたとき、彼、彼女は確かに生きていたのだ。

記憶に残ること、思い出してもらうことは、女が生きた証そのもののなのだ。男に直接コンタクトをとるのでは意味がない。男に、おのずと思い出してほしいのだ。彼が女のことを思い出すことができないうのは、新たな花嫁の存在があるのではないか。そう考えた女は、自らの存在を肯定するため、このような行動に及んだのではないだろうか。思い出してもらうことは、ともに生きていくということでもある。最後まで一人の妻として、思い出を残し、記憶として添い遂げようとしたのではないだろうか。

私はたびたび人間としての生の終わり、そして個人の意識の終着点を考える。意識が途切れ、自覚しないまま消えていく。誰かがそれを経験したとしても、他者の人生は続いていく。個人は、あたり

まえに世界の中心ではない。この広い宇宙のたった一個体でしかない私が死んだところで、それほど大きな損失もないし、利益もない。この星、そして宇宙規模で考えると、私という存在は、結局いてもいなくても関係がないものである。それでも、人間は生きることに、そしてその過程や結果を残すことを求めるのだろう。それは本能的なもの、功績などを主張するものとも言えるかもしれないが、慕う誰かにその人の終着点まで連れていってもらおうという自己満足、または愛しい誰かの支えとなるためなのかもしれない。

端的に言ってしまうと、女が浮かばれなかったのは、男が約束を破り、新たな花嫁を迎えたからである。でも、ただ約束を破ったからではなく、女を忘れてしまった、すなわち無意識に女の存在をなかったものにしてしまおうとしたからではないだろうか。男のその罪は、彼の周りにも影響することとなった。本当に重い罪というのは、受刑者とその家族のように、一人で償いきることのできるようなものではないのである。

結果として、女の望んだ鈴は怪しき、怖ろしきを引き立てるものとなり、その存在を忌むべきものとなってしまったのかもしれない。

だが、その本質は生きていたことを覚えていてほしいという、女の純粋な願いだったのではないだろうか。

力作がそろい読むのが楽しかったです。

「受け継がれる小泉八雲」は作品の分析が的確で文章表現も巧みでした。八雲の再話文学がヒップホップのようにリミックスとフロウによって元ネタを越えて新たな物語に昇華し、現代人にも刺さる普遍性を得ているという指摘に感心しました。ただし、知識の羅列に終わり、ご自身の心情が控えめにしか書かれていなかった点が惜しまれます。

「日本人の微笑に見る国際交流の基本」は自身が韓国、中国で暮らした経験から対話によるお互いの違いを知ることの大切さを説いてくれました。一般論が多く、心に刺さる自分の言葉が足りなかったのが残念です。

「破られた約束」から学ぶ生きることとは」は忘却することの罪を考えさせられました。人は二度死ぬ、生命が失われた時と忘れた時、という言葉を思い出します。

(講評者 高嶋 敏展)

## 〈優秀賞〉

## 雪女が映す日本の美と無常

北海道札幌市 山本美和

小泉八雲の『怪談』の扉を開くたび、私たちは単なる古い怪奇譚を読むのではなく、明治の日本に魅せられた一人の異邦人の魂が、雪深い土地の信仰と人情に深く共振した記録を追体験することになる。中でも「雪女」は、その数ある怪奇譚の中で、最も純粋なロマンスであり、最も残酷な無常を突きつける作品として、私の心に深く刻まれた。

私は、八雲が描く雪女の描写にまず、強烈な美意識を感じる。彼女の白さ、肌の透明さ、その息遣いが老木こりの茂作を凍らせる冷徹さ。それは、西洋的な恐怖の怪物(モンスター)とは一線を画している。雪女は、超自然的な力を持つ「自然の精霊」であり、畏怖の対象ではあるが、その存在自体が完璧な美として描かれている。この美しさは、日本の美術や文学が古来より尊んできた「滅びの美学」と深く結びついているように感じられる。一瞬にして消えてしまふ雪のように、儚く、触れたい存在。八雲はこの日本の雪景色の中に、西洋のゴシックロマンスとは異なる、静謐で、厳しく、そして情愛に満ちた「日本の美」を見出したのだらう。

物語の核心は、雪女が蓑吉に課した「誰にもこのことを話してはならない」という誓約にある。西洋的な物語では、神や魔物との誓約は、しばしば主人公の知恵や勇気によって破られ、打ち勝たれるカタルシスを提供する。しかし、「雪女」における約束破りは、極めて人間的で、同時に悲劇的だ。

蓑吉が約束を破ったのは、妻となったお雪が、あまりにも完璧な、理想の女性だったからに他ならない。暖炉の火を見つめ、過去の恐ろしい体験を、「こんなに美しい妻といふ今の自分は、もう大丈夫だ」という無意識の安心感と、「妻にだけはすべてを話したい」という甘えから漏らしてしまう。これは、英雄的な失敗ではなく、人間の弱さ、そして愛の深さゆえの過ちである。八雲は、この物語を通じて、日本社会が持つ「義理」や「人との約束」の重さを、超自然的な力を用いて浮き彫りにした。個人主義的な西洋社会の倫理観では測れない、共同体における暗黙の了解や誓いの絶対性を、雪女という「神罰」の執行者を通して描いたのだ。

雪女は約束を破った蓑吉を殺さなかった。それは、二人の間に生まれた子供たちのためである。この瞬間、雪女は恐ろしい精霊であると同時に、母性の愛を持つ女性へと変わる。八雲はこの転換により、物語に深い悲劇性を与えた。彼女は愛する夫の命を奪うことと、我が子の母親であり続けることの板挟みとなり、最終的に子供たちを優先し、永遠の別れを選択する。

この結末こそが、西洋の物語にはない日本の無常観を最もよく表していると感じる。西洋の物語では、愛が真実ならば困難を乗り越

え、ハッピーエンドに至ることを求めがちだ。しかし「雪女」では、愛がどれほど深くとも、人知を超えた宿命（＝誓約）の前では無力であり、別れは避けられない。この永遠の喪失が、物語を単なる怪談ではなく、高貴な悲恋物語へと昇華させている。雪女は、蓑吉に「もし、子どもたちを不幸にすることがあれば、すぐに戻ってきてお前を殺す」という警告を残して消える。これは、失われた愛が、残された者の生を律するという、極めて重い教訓となっている。

「雪女」を読むたびに、私は小泉八雲という人物が、いかに深く日本という文化の核心に入り込んでいたのかを実感する。彼は、日本の古い物語を、当時の西洋人が最も理解し、共感できる「ロマンスと倫理の葛藤」という普遍的なテーマに昇華させた。

現代社会において、この「雪女」が持つ意味は、さらに深まっているように思う。私たちは今、SNSやデジタルツールを通じて、無数の約束や情報（秘密）を交わしている。しかし、その「約束」の重みは希薄化し、簡単に破られ、忘れ去られがちだ。八雲が描いた「言葉と誓いの絶対的な重さ」は、現代の希薄なコミュニケーション社会に対する強烈なアンチテーゼとして響く。

私自身のこれからの思索の方向性として、八雲の他の怪談や随筆、例えば「耳無芳一」や『仏の畑の落穂』などを通して、彼がどのようにして日本人の「魂の在り方」を捉え、西洋的なリアリズムと日本の霊的ロマンスを結びつけたのかを、さらに深く探求したい。八雲は、日本の古い「かたち」を通して、現代人が見失いがち

な「日本精神の深奥」を、時を超えて私たちに問いかけ続けている。彼の作品を読むことは、私たち自身のアイデンティティと向き合う旅でもあると確信する。

## 〈優良賞〉

### MUJINAを味わう

東京都 霜倉 チャールズ元氣

「貉」は僅か数段落の怪談だが、読み終えた後も暗い夜の坂道を歩くたびに思い出してしまう余韻を残す。和訳でも十分に楽しめるが、英語の原文の「MUJINA」を味わうことで、八雲が仕掛けたユニークな技法が鮮明に浮かび上がってくる。

雑にあらすじを書くところだ。夜の東京・赤坂の紀伊国坂で、老商人が濠の縁にかがんで泣いている女に声をかける。彼は見知らぬ相手でありながら、身を投げはしないかと本気で心配し、何度も優しく声をかける。しかし女が振り向き、袖を下ろし、手で自分の顔を撫でてみせたとき、そこには目も鼻も口もなかった。きゃッと声をあげ命からがら逃げた商人は、蕎麦屋の提灯を見つけて駆け込む。だが、彼が蕎麦売りに恐怖を語ると、蕎麦屋は「女が見せたのはこんなものか?」と言って自らの顔を撫で、それもまたのつぺら

ぼうの顔だった。同時に灯りは消えてしまう。善意から女に声をかけた商人が、その善意ゆえに恐怖に陥ってしまった。見て見ぬふりをすれば何も起こらなかった、親切心が仇となる、居心地の悪い結末だ。

作品の冒頭で、最後に貉を見た人は三十年前に亡くなった老商人だったと明かされる。読者は、物語がもう検証できない過去の話だと知って読むことになる。怪談の信憑性を宙吊りにする技法だ。そして「二段オチ」が見事である。一度目の怪異で読者は驚き、安堵するはずの蕎麦屋で再び恐怖に突き落とされる。また、商人がどうなったか語られず、読者は置き去りにされる。この話は誰が語り継いだのか。

女が顔を見せる場面の描写も巧みだ。普通、泣いている人は涙を「拭う」。しかし彼女は顔を「撫でた」。あたかも顔があるべき場所を確認するように、あるいは顔を「消す」ように。動詞の選択が面白い。

原文で読む醍醐味は、八雲が意図的に残した日本語にある。日本語がそのまま残されている箇所には、呼びかけ、感嘆、固有名詞、物の名という共通点がある。いずれも翻訳すると失われるものを含んでいる。敬意の度合い、叫びの響き、文化的事物の質感。重要なのは、これらが英文の中で異物として際立つことだ。読者は滑らかに読み進められず、立ち止まり、音を頭の中で転がす。怪談とは日常が崩れる瞬間を語るもので、文章の滑らかさを崩すことで、読む行為そのものが怪談的な体験になる。これこそが八雲の狙いだった

か。

商人が女に呼びかける。「Ojochū」は九回も繰り返される。英語の読者にとって、この見慣れない言葉の反復は呪文のように響くだろう。商人は知らずして、人間でないものに人間への呼びかけを続ける。その空回りが、繰り返しの途中で次第に痛々しく聞こえてくる。

商人が発する「Aai aai aai」も印象的だ。英語なら「Oh!」や「Ah!」が自然だが、八雲は「ああ!」の音をそのまま残した。口が大きく開かれ、意味をなさない声。言葉になる以前の、純粹な恐怖の発露。蕎麦屋の相槌「Hei」もまた、英語圏の読者にはニュアンスのわからない音として響き、次の文でそれが不気味な笑いであることに気づく。

八雲の再話には、自らの体験を反映させる特色がある。「貉」にも子ども時代の記憶が影を落としているという。ダブリンに住んでいた頃、冬にしか訪れないはずの逗留客ジェーンの姿を季節外れに見かけ、声をかけると振り向いた顔はのっぺらぼうだった。八雲は気絶するほどの衝撃を受け、その後ジェーンは間もなく亡くなった。この体験を踏まえると、「貉」の女もまた死者なのではないかという相像が浮かんだ。

濠に身を投げたか、事故で落下したか。女の「幽霊」が泣いていたのだとすれば、蕎麦屋こそが貉で、怖気づいた人間をさらに怖がらせる悪戯をして楽しんでいたのかもしれない。であれば、途中まではシリアスな物語が、少しコメディ的な雰囲気をつけた結末に

なったということなのだろうか。あるいは、夜の紀伊国坂で濠に落ちる危険を警告するための当時の人々の作った物語だったのか。

この作品には日本の怪談には特徴的な「曖昧さ」が貫かれる。のっぺらぼうの正体は何か、なぜ商人を脅かしたのか、八雲は一切語らない。この余白が読者の想像力をかき立てる。「説明できないもの」をそのまま受け入れる日本的感性を映し出しているだろうか。夏の怪談番組やSNSで広がる都市伝説を見れば、その心性は現代にも脈々と受け継がれていることがわかる。顔のない幽霊や妖怪というイメージは、日本のエンタメ作品に繰り返し登場する。人間の形を保ちつつも人間でない存在という不気味さは、時代と媒体を越えて生き続ける。

西洋人でありながら日本文化の魅力を世界に伝えようとした八雲の姿勢は、グローバル化が進む現代に通じるものがある。日本人自身が意識していない「異文化」を外から気づかせてくれる存在として、その視点は今なお示唆に富む。

## 〈佳作〉

### 青柳のはなし

兵庫県神戸市 宮寺良平

ラフカディオ・ハーンの『青柳のはなし』は、友忠という文武両道の若い侍が猛烈な吹雪の中で苦渋しているところから始まる。その時、彼は坂の上に茅屋の屋根を見つけた。その家に辿り着くと、老夫婦が彼を暖かく迎えて食事を出してくれた。屏風のうしろから酒の給仕に出て来た少女を見て友忠ははっとする。これまで見たどの女性よりも美しかった。彼女は一挙一動に彼を驚かさしとやかさがあり、強く惹かれた友忠は翌朝出立する時に彼女を妻として連れて行きたいと老夫婦に願う。願いは叶えられて友忠は彼女を連れて旅立つ。彼女の名前は「青柳」であった。

いくつかの困難があつたが、二人は結ばれて五年間楽しく一緒に暮らした。しかしある朝に青柳は不意に苦しみ始め、彼女は木の魂で、誰かが彼女の木を刈り倒して居ると言う。「私は死なねばならないのです！泣くことさえ、もうできません！早く、念仏を唱えて！」と言い残して姿は跡形もなく消えた。友忠は頭を剃って僧になり、諸国を行脚してかつて青柳の両親の家があつた淋しい場所に着いた。その時のことは次のように書かれている。

「ただ柳の切り株が三つ……二つは老木……一つは若木の……彼が訪れるよりずっと以前に切り倒された跡があるばかりであつた」彼は三

つの柳の切り株の傍にお経を書いた碑を建て供養した。

この話には二つのテーマがあり、一つは死を超える愛情である。木の魂であつた妻が亡くなつた後に友忠が再婚せずに僧として供養を続けるのも、死を前にした青柳が念仏を乞うのも、背景には生まれ変わっていつの世にか再び会いたいという強い思いがあるのではないだろうか。

もう一つのテーマは樹木への愛情で、この作品に独自なものである。樹木のことには『東洋の土を踏んだ日』に書かれているので一部を引用する。

「どうして日本では、樹木がこうも美しいのであろう。この神々の国では、昔から木々もまた、人間になれ親しんでわが子のようにいとおしまれ、その果てに木々にさえ魂というものが宿るようになり、ちょうど愛された女のするように、自分をいつそう美しくすることによって、この国の人たちに感謝の心を表そうとつとめているのだらうか」

樹木に向けたこれほどの愛情のこもつた文章はハーン以外では読んだことがない。ハーンは、三つの切り株のシーンを感情を抑えて描いている。この時に彼の心にあつたはずの深い悲しみが、ハーンの妻節子の『思い出の記』に書かれている。夫婦が自宅に近い瘤寺に散歩をした時、八雲が驚いて、声を上げた。大きい杉の樹が三本切り倒されていたのだ。家に戻つたハーンは、「私あの有様見ました、心痛いです」と言つたそうである。その寺が大好きで、そこに僧となつて住みたいとまで言つていたハーンがその後は立ち寄るこ

とも少なくなつたことを考えると、悲しみは深いものだったのだから。

哲学者の西田幾太郎は田部隆次氏が『小泉八雲』を出版した際に序文を書き、ハーンは日本の文化や昔話の中に、「日本人自身すらかつて知らない深い魂を見出したのである」と書いている。西田は別の著作の中で長い歴史を持つ東洋文化の根底には、「形なきものの形を見、声なきものの声を聞くといったようなものが潜んでいるのではなからうか」と書いている。

私の家の庭には金木犀の老木がある。幹はひび割れていて、樹の寿命が尽きたと思つたが、少しこまめに水を与えるようにしたら、ある日美しい花を咲かせて、芳しい香りが満ちていた。樹が感謝しているように思えた。しかし、ハーンは、樹木の命については、私よりもはるかに強い思いを持っていた。樹木の美しさの奥には、形なき魂を見て、樹木が切り倒されたときには、そこに声なき悲しみの声を聴いたのだから。だから「心痛いです」と妻に語つたのだから。その思いが、美しい「青柳」が切り倒される悲しい物語となつたのだろう。

彼は美しく繊細な日本文化が近代文化によって失われていくことを憂っていた。近代化は貧しい日本が物質的に豊かになるために必要だったかもしれないが、現代文明は、多くの問題を抱えて、行き詰まってきたている。昔に戻ることはできないし、それが良いこととは限らない。しかし、失つたものを振り返る時期が来ているように思う。そして貴重な文化を取り戻しながら、未来に向かって進まな

いといけないのであろう。現代の私達にとって、多くの大切なことがハーンの文章の中にあることは間違いない。真摯に読んでいこうと思つている。ハーンも同時代の読者だけでなく、後に続く世代が日本文化の良さを理解することを期待したはずである。

## 〈佳作〉

### もしも自分が雪女だったら

福岡県北九州市 有馬 広海

ある日、小学生の孫に小泉八雲の「雪女」の読み聞かせをしてあげたことがあつた。孫は、雪女ってデイズニーのアニメ映画「アナと雪の女王」のエルサに似ているねと言つた。

そういえば、エルサは雪女と同じように雪や氷を操る不思議な能力を持っていて、他人からは理解されない寂しさを心に抱えている。恐ろしい妖術使用だと非難されて、雪山に籠つたエルサには確かに雪女に似た状況がある。

あなたは、「もしも自分が雪女だったら」という観点で考えてみたことはあるだろうか。自分が厳しい寒さの雪山の中で、たった一人で寂しく暮らしていたとしたらどうだろう。

私は小泉八雲の雪女という物語を深く理解するためにその考えを

試してみようと思った。以下は、自分が雪女だったとして巳之吉と出会って別れるまでを雪女が振り返るといふ、雪女の日記的な設定で考えてみたものだ。

この孤独はいつまで続くのだろうか：

心の中で何度も繰り返し自問する。おそらく永遠に終わることはないだろう。なぜなら雪女は年を取らないからだ。永遠の命を持つということとは、そういうことなのだ。雪女の存在を人間に知られてはならない。もしも人間に知れわたってしまったら、大勢が雪女の不死の秘密を探りに雪山に押し寄せるに決まっている。茂作という男などは、一度は見逃してやったのに雪女のことを他人に話してしまつたから殺さなければならなかつた。

だが、そんなとき出会つたのが茂作と一緒にいた巳之吉という美少年だつた。

私は一目で恋に落ちた。巳之吉ならば茂作と違って、決して雪女のことを他人に話したりはしないだろう。そう思つたのだ。

巳之吉と出会つてから、心の中に日ごとに募ってくるもう一度会いたいという気持ち、恋慕の情が強くなつて来た。それはもはや自分では抑えることができなくなつてしまつた。

だから人間の女になつて巳之吉の家にやつて来たのだ。それは彼を見張るためではなく心から彼と一緒に暮らしたかつたからだ。

巳之吉と共に暮らした日々は本当に幸せだつた。雪深い山で孤独に暮らしていた頃とは雲泥の差だつた。私は初めて幸せを感じた。

しかし、そんなある雪の日に巳之吉はどうとう約束を破つて雪女

の事を話してしまつた。

「それは私、私、私でした…それは雪でした…」

巳之吉との永遠の別れを覚悟したとき、悲しみがかすれて詰まつた。いつの日か、別れが来るのはわかつていたのに：

たとえ巳之吉が約束を守つて雪女のことを誰にも話さなかつたとしても、別れはいつかやつて来る。なぜなら雪女は年を取らないが、人間は年老いてやがては死んでしまうからだ。

だが、それでも良かった。ほんの一瞬でも良いから愛する人と長く一緒にいたかつた。

初めて出会つた雪の日のあなた、妻となつてからは優しく私を氣遣つてくれたあなた、悲しい別れの雪の日のあなた。私の心の中には、いつもあなたがいる。悪いことばかりではない。いま別れることで、あなたの死も子どもたちの死も、私は見ないで済むのだから。

さあ、雪の舞い散る山に帰ろう。白い雪が私の帰りを待つている。やはり私の住処は、雪の中にあつてその伴侶は永遠の孤独なのだ。

以上、私の勝手な解釈で「自分が雪女だつたら…」という観点で物語を考えてみた。

この発想のものは、雪女を読んで二つの疑問があつたからだ。一つはなぜ茂作が殺されたのかだが、永遠の命を持つ雪女ならば遙かな時間を隔てて、茂作も巳之吉と同じように雪女と出会つていて、雪女のことを話さないという約束していたのではないかと考えら

れる。だが茂作はその約束を破って、巳之吉に雪女のことを話してしまつたから雪女に殺されてしまつたのだらうと考えた。もう一つの疑問は、なぜ巳之助は殺されなかつたのかだが、雪女が「あなたは美少年ね」と言っていることから一目惚れをしたのだと考えてみた。

別の理由があるとするれば巳之吉が若かつたことだろう。若い巳之吉となら自分と長く生きていけるとそう雪女は考えたのかもしれない。

私が、最初に小泉八雲の雪女を読んだとき、孫と同様に他作品との類似点を発見していた。

それはデンマークの童話作家アンデルセンの「人魚姫」で、結末が雪女とよく似ている。

雪女では子どもたちのために、巳之吉を殺さずに自分は雪となつて消えていくが、人魚姫の最期もどうしても愛する王子を殺せず、海の泡となつて空高く昇っていく。二つの物語の結末は悲劇ではあるがまた感動的であり、今でも私の心の中に深い印象を残している。

物語のヒロインが自分の命よりも相手のことを大切に想つて消えていくラストの余韻こそが名作と呼ばれる所以だと私は思っている。

## 〈佳作〉

### 海を巡つて

静岡県静岡市 鈴木 ゆみ

八雲は海に特別な思いを抱いていたようだ。いくつかの海をテーマにした作品からは、海への親しみの感情だけではなく、強い恐れ  
の感情が伝わってくる。彼はなぜ怖がりながらも、生涯に渡り海  
そばで過ごすことを好んだのか。二つの随筆を読んで海との関係を  
考えてみた。

「焼津にて」では、お盆の精霊流しを見るために、なんと夜の海  
に飛び込むというエピソードが描かれる。かなり泳ぎに自信があつ  
たのだろう。八雲は「海には魂があり耳がある」という言い伝えを  
引きながら、夜の海で泳ぐと、まるで敵意を持った生き物・怪物に  
包まれている感覚だと語る。彼は海の荒々しさを恐れながら、一方  
で魅かれていた。「怪談」を執筆した八雲らしい。

夜の海はどんな感じなのだろう。この話は読後も気にかかつてい  
たが、旅行で海沿いに泊まつた時、ふと思ひ出した。さすがに泳ぎ  
はしないけれど、いい機会なので海岸通りを歩いてみることにし  
た。

月のない夜で暗かつた。目をこらすと、大きな潮のうねりが闇に  
見え隠れする。海の色配だけを感じながら、波音に耳を澄ませる。  
日の光の下では景色に気を取られがちだが、夜は音だけに集中でき

た。穏やかな波音は、優しいささやき声のように聞こえ、荒波の崩れ落ちる音は、凄まじいうなりのようでもある。たしかに、海は生き物かもしれない。

繰り返される波のリズムと複雑な響きに、その時セイレーンの伝説を連想した。航海者を惑わして、海に引きずり込むというギリシヤ神話の怪物。ギリシヤで生まれた八雲も、きっと脳裏にあっただろう。

視力が低かった八雲は、聴覚が鋭敏だったのかもしれない。そして、なにより海への畏怖の感情があった。海を死者と結び付ける思想は民族を問わず多いが、彼は夜の海に対峙して、人間を圧倒する大きな存在であることを強く意識したに違いない。

さらに「夜光幻想」という作品では、海を中心に、静かで美しく内省的な世界が広がる。夜空を埋め尽くす星の輝き、闇の中で海を眺める八雲と、波間に光る夜光虫。彼は自分の境遇をはかない夜光虫に重ねた。

ヨーロッパからアメリカに渡り、極東の国にたどり着いた八雲は流浪の人だった。様々な国を渡り歩き、多くの人と出会い、広い世界を知っていたから、多様な視点で物事を見ることができた。早くに両親と離別し、人生の理不尽も身に染みていただろう。

人の一生は、どれだけ色々なことがあっても、宇宙の中ではほんの一瞬に過ぎないちっぽけなものだ。その宇宙さえも、より大きな世界の一部にすぎないのだと。けれどもそこには、不思議と寂しさは感じられない。むしろすがすがしいくらいの諦念が漂う。

私はこの無常観に、かえって安らぎを感じた。すべては移り変わるのだから、何にもとらわれる必要はない。彼がそんな境地に至ったのは、人間関係で何度も裏切りや失望を経験したことが影響しているかもしれない。

同時に、異国に骨をうずめて文学に取り組む覚悟も感じられる。当時、健康不安を抱えていたのに、決して悲観的ではない。

数々の紀行や随筆を残し、埋もれていた民話を発掘する大仕事を成し遂げた八雲。海は、彼に畏怖とインスピレーションを与え続ける重要な存在だったと思う。母を早くに亡くした彼にとって、まさに母なる海だったかもしれない。

私も海の前に立つと、恐れと安らぎの相反する感情が湧いてくる。まだ夜光虫を見たことはないけれど、いつか見ることができれば、どんな気持ちになるだろうか。いまは八雲の作品を読んで、想像を楽しんでいる。

講評

今年NHK朝の連続テレビ小説『ばけばけ』の影響もあり、非常に多くの方にご応募いただきました。

最優秀賞に選ばれた「雪女が映す日本の美と無常」では、作品を通じて、「禁忌」や「愛」、「約束」について考えを巡らせているのが印象的でした。日本と西洋の違いだけでなく、過去と現在において私たちがそれらとどう向き合っているかということについても言及されました。

優秀賞、佳作に選ばれた作品についてはどれも甲乙つけがたく、審査員の間でも意見が割れました。どの作品も構成がしっかりとしていて、無駄がなく、感想がよく伝わってくるものでした。

来年以降応募される方に関しては、あらずじは最小限にとどめ、感想を整理したうえで構成に気をつけながら書かれるとよいと思います。来年も楽しみにお待ちしております。

(講師者 三成 清香)

詩

〈優秀賞〉

雪の虹彩

東京都文京区 岩本 遥

北の果てでは、

雪が音もたてずに降りつづき、

世界の息づかいは

厚い氷の下に

しんと

しまわれていた。

皇帝ペンギンは動かない。

静けさには、

吐息さえ届かないほど遠く、

古い意思が

じっと宿っていた。

その世界の裏側で、  
ひとりの旅人が

吹雪の中へ身を沈めていた。

頬は風に削られ、

髪には霜が

淡く積もっている。

ふり向いた横顔を、

だれかが

雪の陰から見つめているようだった。

昔、山中で若者を見とどけた

雪女の視線が、

そのまま重なったかのように。

\*

北極にたどりつくと、

昼と夜が重なるあわいで、

皇帝ペンギンが片目を開いた。

その虹彩は、

雪女の白い息が

細い輪となって凍りついたように、

冷たく澄んだ光輪を  
燦燦ときらめかせていた。

旅人がそつと願いを囁くと、

皇帝ペンギンは氷上に

長い影を落とし、

地軸を、

雪の結晶ひとひらほどに、

かすかにずらした。

その瞬間、

じめんが低くうなり、

星屑が雪とまじってふった。

氷の鳴る音にまぎれて、

どこかで女の声があった気がした。

(さわったね)と、

笑う気配が

白い息のように薄れていく。

笑い声は風をすり抜け、

やがて雲の彼方へにじみ出て、

太陽のまわりに

細い波紋を描いた。

あとに残ったのは、  
ひどく長い沈黙だけだった。

向こう側の闇が

やわらかく透けはじめる。

雪女が、

男の前からふっと姿を消した

昔話の結びのように、

世界は、

音も立てずに

輪郭を手放してゆく。

最後に残ったのは、

風の無くなった後の匂いと、

旅人の胸の奥で、

消えきらずに灯る

かすかな温もりだけだった。

「これでいいんだ」

その声は雪あかりに溶け、

白い霞のように、  
さらさらほどけていった。

## 〈優良賞〉

### 海を渡る影

大阪府大阪市 どひひ

遠い海を渡るたび、

世界の輪郭がどこかで密かに揺れた。

光より先に、影が胸の奥へ沈んでいく。

耳ではなく、風の呼吸が

名より確かな響きを持っていた。

見えるものはほどけ、

見えないものだけが長く残った。

異国の夜道を歩くと、

まだ見ぬ白い朝が遠くでほどけ、

闇と光の境目だけが、

細い道になって立ち上がった。

どこかが欠けているように感じる。

それは失われたものではなく、

世界がこちらへ入り込むための、  
密かな窓のようだった。

その窓から差し込む名のない光が、  
胸の奥に触れた。

誰のものでもない震えが、  
古い影の記憶を呼び起こす。

その震えの意味は最後まで掴めなかった。  
ただ、歩むたびに生まれる空白だけが、

見えない道のように、  
静かに前へと伸びていった。

## 〈佳作〉

### 怪物のいいわけ

埼玉県さいたま市 くるみ

あのまま誰とも話さず

どこへも行かず

絶望の底にいてくれたなら

わたしを亡くして

生きる意味を

永遠に失ってくれたなら

わたしは

怪物にならずにすんだでしょう

もう会えないことより

これからあなたと会える人がいる  
その事実が辛いのです

約束を破られることより

どれほど軽い気持ちで言ったのか

知ってしまうのが怖いのです

あのまま何も食わず

水さえ飲めず

干からびてくれたなら

わたしを追って

生きる理由を

さっさと手放してくれたなら

あのお嬢さんも

怖い思いをせずにすんだでしょう

あいしてる、あなた  
くやしい

あいしてる、ずっと  
にくらしい

私は怪物です

狂愛の化け物です

棺の中で笑みを浮かべ

美しいまま正座をし

生前と変わらぬ温もりと

額に弾力を持っていても

やはり怪物なのです

## 〈佳作〉

### 出会ったのは風の民

宮崎県児湯郡 日野 秀子

山道を歩き 谷をぬけ

ちいさな村の ちいさな人たち

日の昇る方に顔を向け

「こんにちさま 今日もご機嫌麗しく

あられませ 世の中を美しくなさいます

お光り千万有難う存じまする」

自分たちが創り出した神々を

畏れすぎない朗らかさ

あの世もこの世も一つになる村の盆踊り

遠い太古の響きが届く

田んぼのあぜ道 神社の森

ぽつんとたたずむ地藏さま

死んだ子どもの相手をなさる

飢饉や疫病をも越えて

山を川を大地を人々を 包んでいるもの

それは慈しみの風だと言う

## 〈佳作〉

### むじなの詩

東京都墨田区 牛坂 夏輝

泣いている女の背中で、

湿った神秘的な貯水槽がゆつくりと観念になり、  
そこから抜け落ちた竖琴の胞子が、  
ぼくの見習い期間を噛み砕いた。

信仰が、凝固した眩暈を引きずり、  
眼球と、ひとつの本質的な茂みのなかで、  
痛みを売り払った微笑のように、  
貝殻に到達する。

顔はなかった。  
だが

その熱中する退却の欠落は、  
失われた書物の理解しにくい吐息が、  
遠い塔の内部で  
啓示を受けた昆虫たちの鳴く声に似て、  
いにしえの歌の関節をひとつずつ砕いていく。

毛深いむじなが通り過ぎるたび、  
空中の裸体がざわめき、  
白い極限と羊歯植物の影が  
ぼくの脛肉にゆつくりと沈んだ。

複製画は恋を強制され、報告書の上で

ひとつの嘴の残像が、  
麻痺と承認を婚約させる。

「明日には晴れて、隠れ家の中は流星群で爆発するでしょうね」  
のっぺらぼうの涙が  
砂に触れると、  
砂はひとりの青年の湿った欲望をかたどり、  
脈のない脈動を  
ぼくの乾いた枢へ押しつけてくる。

涙は、水と星が執拗に石段に忠告された航行  
の伝説であり、  
好戦的な季節の蛇たちの落下であり、  
白い平原で演奏される  
帰還のための、管弦楽である。

茶店の主人の顔は、  
はじめから存在しなかったのだろう。  
彼の口元から溢れる  
黒い朝の肉体たちの蒸気が  
ぼくの胸を裂き、

内面にしまっていた

水の通読された悲劇性を腐敗させる。

その腐敗は輪郭のないフルートに満ちて、

むじなの体毛へ

青年の聖具室のなめらかな、濡れた果肉へと

静かに流れ込んだ。

「ぼくと彼は並んで食事した、かぼちゃのブディングを、新しい

油脂を使って、食べたんだ」

夜は素早く傾き、

顔を捨てた者たちの倒錯した焼け跡主義が

深海の刑罰と唇のように漂い、

気配のない幸福なヒトデの鼓動を

路地裏へ植えつける。

ぼくの眼窩には、

もう芝生や侮辱されたトカゲが入らない。

荒れ狂う願いを口にしよう。

岸辺では変化した慣用表現の椅子が、

神秘を恋愛譚に生みなおす。

むじなは

白紙のパノラマを折り畳み

ぼくの茸の生えた肩に触れた。

その残虐な不器用さは、

生まれなかつた別の夜が

いま分婉されようとする

毛深い英雄の

絶叫の果ての夢精と

灰色の菌列の境界で

かすかに燃えるようだった。

内向的な馬蹄が響き、

いくつもの角笛の夜が、

運転手の口内炎に

切断された模範的な泡を示す。

暗がりに足音が浮かぶ。

ぼくらは、

顔のない森の股関節へ向かう。

そこにはまだ、

名づけられない火打石の

最初の終局が眠っている。

## 講評

八雲とセツをモデルとしたテレビの連続ドラマの放映の影響もあつてか、今年の応募作品数は大幅に増えた。応募作品の内容を見ると、八雲作品のストーリー展開をなぞるだけの作品はあまり見られず、作品を読み込むことで見えてきた八雲作品の魅力をそれぞれの個性と感性で表現しようとした作品が多くあつて、読み応えがあつた。

優秀賞の「雪の虹彩」は、雪女の話に想を得て、北の果ての地にファンタジーの空間を創出させた興味深い作品です。〈皇帝ペンギン〉と〈旅人〉の出会いにより地軸がずれるという不可思議な現象が起き、そこに雪女の幻想が重なるという展開が面白く、洗練された言葉遣いとも相まって、美しくも怪しい作品世界を現出させました。

優良賞の「海を渡る影」は、短い作品ですが、遠い海を渡り異国への旅を生きたハーンの心情に寄り添うことで生きる意味を探ろうとする意思が感じられます。少し観念的な表現が気になりますが、〈異国の夜道を歩くと〉〈闇と光の境目だけが、細い道になって立ち上がった。〉など、独特の感覚を納得させる言葉の力を感じました。

佳作の中の「怪物のいいわけ」は、全体が〈いいわけ〉であつ

て、見苦しいほどですが、何故か惹かれてしまう不思議な作品で、タイトルがグッドです。  
(講評者 川辺 真)

### 【審査員】

稲田 忠徳	井上 孝弘	川上 淳一
川辺 真	須山 敏之	高嶋 敏展
三成 清香	村瀬 達男	

(五十音順)

令和7年度

**「小泉八雲をよむ」  
感想文・詩 入賞作品集**

令和8年3月

編集・発行 松江市  
松江市教育委員会  
一般社団法人八雲会